カマボコハウス（通称ボッシュ・タウン）　No. 25

１．学生の困窮を救ったボッシュ・タウン

戦後、授業が再開されたのは、1945 年 10 月 25 日であった。学徒動員から復員してきた学生の多くは、軍服姿のままであった。しかし、中には、下宿難や食糧難のために学業を放棄しなければならない学生も多くいた。「上智大学新聞」（1946 年 6 月 1 日号）は、当時の現状を次のように報道している。

学生に慕われた
フランツ・ボッシュSJ

「”下宿を何とかしてくれ“という声がほとんど毎日のように生活部員を困却させている。ようやく下宿があっても、配給米だけでは足りず、食事なしで月百円（六畳）では、羽振りのよい戦争肥りならいざ知らず、学生には手が出ない。欠席者の三割が下宿難のためだとあれば大きな問題である。戦災者のみならず、困っている学生たちにもすみやかに遊休大邸宅が開放されなくてはならない。」

当時、こうした困窮している学生たちのために上智大学が行ったことは、学生寮を建設することであった。その先頭に立ったのが、学生指導部長であったフランツ・ボッシュ神父であった。終戦の 1945 年に、吉祥寺にあった旧中島飛行機（株）の一部を借り受けて整備し、50 人程度収容できる寄宿舎を確保した。

しかし、大学からかなり離れていて不都合も多かったため、ボッシュ神父は、米軍払い下げのカマボコ兵舎を買い取って構内に移築し、学生寮とした。カマボコハウスは、全部で 12 棟あり、学生寮はそのうちの 5 棟で、１棟が学生の集会所に当てられた。残りの 6 棟は、教職員の住宅やソフィア会事務室に当てられた。

1948 年に竣工したカマボコハウス（通称ボッシュ・タウン）

入寮式が行われたのは、1948 年 4 月 20 日であった。1 棟に 16 人、全部で 80 人収容することができた。聖アロイジオ塾がカトリック信者や求道者の学生寮であったのに対し、カマボコハウスの学生寮は、信者・未信者を問わず、地方出身者のための学生寮であった。舎監のボッシュ神父にちなんで、ボッシュ・タウンと呼ばれていた。その後、1957 年に新たな学生寮ができるまで、寮生たちはこの寮で、イエズス会神父の舎監とともに共同生活を送っていた。

２．ボッシュ・タウンの運営と寮生活

ボッシュ・タウンは、アメリカで青少年の更生のためにエドワード・ジョゼフ・フラナガン神父が設立したボーイズ・タウンに擬したものであった。フラナガン神父は、進駐軍の命によって日本

の戦災孤児を救う活動のために 1947 年に来日し、「赤い羽根共同募金」の提唱者としても知られている。

ボッシュ・タウンは、自治寮であったが、規則は厳しかった。寮生は、6 時 30 分のサイレンとともに起床し、1 号館地下にあった食堂で朝食をとった。ちなみに『上智大学学生寮 30 年史』（以下『学生寮 30 年史』）によると、「朝はコッペパン、昼はどんぶりひたひたの湯の中にさつま芋、野菜、申し訳程度にご飯が浮いている雑炊。夜はうどんが常食であった」という。日本全国が食糧難の時代であった。風呂は聖アロイジオ塾のものを利用し、週に 3 回、月・水・金曜日に入浴することができた。夜の 7 時から 11 時までが自習時間で、11 時に消灯。また、週 1 回のハイキング、月 2 回の討論会、その他、バレー、卓球、野球などの運動競技も行われていた。

カマボコハウス（学生寮）内部

ボッシュ・タウンの寮生は、1956 年の末に上智会館が竣工すると、その中に新設された学生寮に、翌年、聖アロイジオ塾の寮生とともに移転した。その後、このボッシュ・タウンは、「Q校舎」（Quonset House）と呼ばれ、1 棟に 50 名定員の教室として使用され、講義が行われていた。また、1962 年には、学生たちのクラブハウスとなった。新クラブハウスとして 5 号館が建設されたのを機に、ボッシュ・タウンはその使命を終え、1967 年に取り壊された。

３．フランツ・ボッシュ神父

ボッシュ神父は、上智大学学生寮の原点である。次のような話が『学生寮 30 年史』に載っている。

「あるとき、学生が失恋して睡眠薬自殺をはかった。ボッシュ師は、三日三晩、ほとんど寝ないで看病し続け、学生が意識をもどした瞬間、“バカヤロー”と一喝し、自らもポロポロと涙を流した。」

神父は、規則には厳しかったが、学生を心から愛した。そのために学生は神父を“おやじ”と呼び、慕った。日本語も堪能で、白い日本人とも呼ばれた、と『学生寮 30 年史』には書かれている。同じドイツ人でボッシュ神父を良く知るクラウス・ルーメル神父（元上智学院理事長）は、次のように言っている。

枝川寮中庭にあるボッシュSJの胸像

「日本の若者たち、特に戦後の、しばしば裏切られ、誤った指導を受け、非難され、嘲笑された若者たちは、彼ら自身の立場から理解し、彼らの問題と心配事のために力を尽くし、彼らの疑問を一緒に考え、慰めと希望を与えることを見つけようとする、一人の人間を求めていたのだ。そしてボッシュ教授がそのような人間であったからこそ、彼の言葉はあれほどの反響を呼んだのだ」。

ボッシュ神父の机の上には、いつもドイツの詩人ヘルダーリンの「愛の死するとき、神もまた去る」という言葉が書かれた紙が置かれてあった、という。学生を生活難から救うために奔走し、寮生たちを愛し続けたボッシュ神父は、上智会館の中に待望の学生寮が発足した翌々年の 1958 年 11 月 28 日に、心臓麻痺によって急逝した。享年 48 歳であった。

1959 年に神父を慕う人びとによって建立された胸像は長く、上智会館の学生寮前にあったが、現在は枝川寮の中庭に移されて、今も多くの寮生たちを見守っている。